

年寄りなんか大嫌い

— 古希のあとさき —

板倉和男



理想の高齢期とは

周到な壮年期の先に
黄金の日々が：

板倉 和男

1929年2月12日、東京・滝野川に生まれる。1950年都立工業専門学校（現都立大学工学部）機械科卒業。現在、板倉理化学器械製作所・代表取締役。1969年国体スキー競技東京都代表選手として出場。

年寄りなんか大嫌い ——古希のあとさき——

2000年11月6日発行 初版第2刷

筆者 板倉 和男

発行 小学館スクウェア

〒101-0061 東京都千代田区三崎町1-1-9

電話 03-5282-2281

印刷・製本 手塚印刷株式会社

©2000 KAZUO ITAKURA Printed in Japan

ISBN4-7979-8001-X

年寄りなんか大嫌い

——古希のおとこさま——

目次

危険なデート		5
射精ありますか？		32
空中楼阁		52
青葉城恋歌		60
ホモ・ルーデンス		65
再会		75
魔の山		92
摩天楼		109

雪の宿	121
白衣の天使	129
花を持ちて	148
バーチャル・リアリティー	157
美しい海	164
城ヶ島の磯にて	176
母の実家	190
金色の蟹	202
ラッキーな人生	215
ボディー・サーフィン	231
至福の時代	254
古希のあとさき	264

カバードザイン／
レディバード

危険なデイト

Uゴルフのクラブハウスを出てほんの少し走ると、道は直角に右へ曲がり、短い急坂に登って桜並木の堤通りに出る。あと二ヶ月もすれば花吹雪が舞う土手の道を三〇〇メートル程行くと、荒川を渡って秋ヶ瀬橋から降りてくる県道志木―浦和線に合流する。ここから国道17号の田島交差点までは僅か六〇〇メートルの距離だが、慢性的な渋滞で、東京方面への右折信号を通過するまでに一〇分近くかかる事がある。今日は昼食の時、一諸にラウンドした地元ゴルフファーに、抜け道を教えられたのでこれを試してみる事にした。

まず急坂を登る所までは同じだが、土手の上を走らずに、すぐ急角度に左折して土手の反対側に下ってしまう。そんな道があったとは気づきもしなかったほど狭い道だったし、後に続く車に気をとられていたから、今村のハンドル操作は僅かに遅れた。右の前輪がアスファルトの舗装からはみ出し「ズルッ」と音を立てて土手下の溝へ向って一〇センチ程ずり落ちた。「まずい!」と思ったが切り返しをせずに、そのまま最徐行でこの難所を通

過すると、すぐにシフトレバーをロックしてドアから飛び出した。土手の上で立往生しているベンツのフロントガラスの中に、やや緊張した久美の白い顔があった。手を大きく回して誘導すると、後の車は用心深く、だがためらわずにハンドルを切って急な坂を降りて来た。

そこから先は、直進しては左折、そしてまたすぐ右折、そして直進して左折……を繰り返す。途中クランク状の曲り角で、反対側から出て来る乗用車と、左から進んで来たバスと三すくみの状態になってかなり手間どったが、とにかく17号の下り車線に突き当たる事が出来た。

左折標識があるだけで信号はない。運良く下りの流れは途切れていた。今村は窓から手を上げて後車に合図すると、二車線を一気に横切って中央車線に乗り入れた。次の信号の手前にUターン路がある。今度は上り車線を大型トラックが唸りを上げて疾走する中へタイミングを計って合流する。久美は意外なほど勇敢に、すぐ後について走った。

田島交差点の手前からレストランの裏側の駐車場に入ったが、運悪く一台分しか空がない。レストランの左を回って正面の駐車場へ入ろうとしたら浦和方面から交差点に向かう車が、ぎっしり詰って道を塞いでいる。信号が変われば今度は反対方向から車が流れ込んで来るから、いつまでたっても店には入れない。とっさの判断で、今村はかまわず反対

車線を三〇メートル程走ってレストラン正面の駐車場へ乗り入れた。久美の車もびったりついて来る。

一〇分余りの冒険ドライブを無事終えて、黒のベンツから降り立った久美の顔には未だ緊張が残っていた。

「このデイトはかなり危険な要素をはらんでいますね」と今村は笑いながら言った。

「ほんとに怖かった。さっきは川に落ちるかと思いました」

久美は半ば真顔だった。「あなたとならどこまでも堕ちてみたい」なんていう台詞はこの際思い浮かばなかった。

今村昭四郎——長男だが昭和四年生れでこの名がつけられた。

日本橋から北へ二つ目の一里塚のある、山の手と下町の境い目に当る新開地に、今村の父親が小さな町工場を開業したのは大正十三年の事だった。昭四郎は在学中から父の手伝いをしていたから、すでに五〇年仕事を続けている事になる。

二十数年通っているKカントリークラブは、関東平野の中央に在って、都内から一時間余りの近距離だが、帰途は行楽帰りの渋滞に巻き込まれて二時間近くかかる事がある。六十代も終りに近づいた今村は、帰りの運転がしだいにつらくなり、将来を考えて、都県境

から僅か一〇分で行けるUゴルフクラブに入会した。Kカントリーには友人が居て、日曜ごとに顔を合せるのが楽しみであったから、Uゴルフでは差し当り毎月一回行われる平日杯競技に参加する事にした、五〇年も働き続けて未だに現役の今村は、そろそろ平日ゴルフの回数を増やそうと思っている。

Kカントリーと同じ一五のハンデキャップをもらって、初めての競技に参加したのは昨年の十月である。平日だから当然女性の参加者が多く、半数近くを占めているように見えた。練習グリーンでは、それぞれ原色をふんだんに使った個性的なゴルフウェアで、派手ばでしく装った、貫録充分な女性達が賑やかに談笑している。誰もが、コースのそここに根づく大樹の風格すら備えていて、今村を圧倒した。なかでも特に目立つ一人とすれ違った時、一メートル以上離れているにもかかわらず「ムツ」と鼻を突く香水の強い匂いに、今村は思わず顔を背けた。

息を潜める思いでおずおずあたりを見回すと、まるで場違いのように、ひっそりとたたずむ若木のように細くしなやかな人の姿が今村の視野に入った。周りの雰囲気馴染めずに、固い表情で当惑の視線を宙に浮かせて立ちすくんでいる。異質とも見えるモノトーンの淡い色調の上下に、珍らしい小さくそり返った丸つばの帽子も、また地味でくすんだ色合いだが、全体としての洗練度は際立っていた。今村はパッティングの練習をしながら、

ずっとその人を目で追っていたが、スタート時刻が迫ったので、自分のキャディーバッグが積んであるカートに近づき、キャディーにパターを渡した。

「藤井です。よろしくお願いします」

とその人は挨拶した。緊張した表情はむしろ暗く厳しく、笑顔は見せなかった。

スタートの一番をホールアウトして、「今村五回です」と同伴者に打数を告げた。

五十歳そこそこに見える浅田氏は髪はボサボサだがハンサムな飛ばし屋で、二打でグリーンを捉えて楽々のパーだった。

その時「くみ」六です」と澄んだ声が背中から聞えた。

「あれ、くみさんとおっしゃるんですか？ 私の娘もくみなんですよ」

「あらそうなんですか」

と、ごく自然に会話が始まった。

一方浅田氏の手法は簡単明瞭だ。もともと人なつこい性格と見え、「くみちゃん独身？」とストレートにアプローチを開始する。

自分自身を「くみ」と呼ぶのは、以前よくご主人と一諸にラウンドした時の名残りだそう。子供が出来、幼稚園に通うようになってからも日曜日は一日中子供と一諸なので、夫婦でラウンドする事はほとんどなくなったと言う。キャディーバッグの名札に「藤井久美」

と書いてある。

フェアウェイに立つと、かげろうのように頼りないシルエットを見せる久美さんだが、そのスイングは素直で美しい。この日、今村も浅田もショットがやや荒れ気味で、左右のラフを歩く場面が多かったが、久美は一四〇ヤードずつまっすぐに打ってゆく。

「藤井さんのゴルフは、ほんとに無駄がないね」とキャディーが感心する。

「無駄のない所は久美さんのプロポーションと一諸ですね」

今村は何気なく言ったが、プロポーションを文字通り訳せば、身体の外形の各サイズの比率となる。この場合は数値で表す事の出来ない、久美の持つ雰囲気と動作が完全にマッチして、そこに何の違和感がない事を言いたかった。久美のシルエットを極限まで単純化すると、一本の縦の線になる。だがこの線は毛筆で引いた直線であって線そのものに柔らかなアクセントがある。今村のパッティングラインの向うに久美が立っていた。視線を下げてラインを読もうとすると、それと気づいた久美は軽ろやかに、ひらりと体をかわしたグリーンを取り囲む松林を背景に、羽衣の天女の舞いもかくやと思うほど優雅な身のこなしであった。

「そのまま立っていても良かったのに」今村は久美を見ながらパッティングしたかった。一方、久美のパッティングはソフトな雰囲気とは対称的に、かなり強目だ。スタンスを決

めるといとも簡単に打ってしまふ。午前スコアは今村四六、浅田四三、久美五〇だった。昼食の時、久美はスープとサラダと果物しか注文しない。

「それだけ？」

健啖家の浅田氏は自分の前に置かれたステーキ定食と見比べる。

「ダイエット中なので——」久美さんは静かに笑う。

「それ以上痩せてどうするんですか？」

今村は尋ねたが、自分もちょうど口内炎がひどかったので、野菜サンドしか注文していない。

十日程前から部分入れ歯の針金が舌の横に当り、そこから裏側の粘膜に向って大豆ぐらいの血豆が出来た。そのまま放って置くとどんどん大きくなり、やがて自然に破れたので、これで治るかと思つたらとんでもない。薄皮のむけた跡が真赤に爛れて、炎症が舌の奥へ広がってゆく。物を噛むのもつらいし、飲み込むのはもつとつらい。当る部分の入れ歯は外したが、しゃべる度に爛れた舌の側面が外した隣の歯の角に当って涙が出るほど痛む。町の歯科では手に負えないので病院へ行った。悪性の病気の可能性もなくはないと脅されて、血液検査を受けたが幸い異常はなかった。義歯のせいに間違ひなからうと塗り薬をくれた上で、「針金のない入れ歯にしない」ときつく注意された。薬が効いて大分楽になつ

ていたが、アイウエオのイの段とエの段は舌が横に広がる分、しゃべる度に歯に当たって未だかなり痛い。それでも、背筋をすっきり伸して、春風のように微笑む久美さんを正面に見ていると、痛みはしだいに薄れていった。

コーヒーを飲みながら、

「これがうちの“くみ”です」

と、いつも老眼鏡のケースに入れて持ち歩いている末娘の写真を見せた。十一月の結婚を控えて、八月末日で退社したその日、最後の出勤の朝、玄関前で撮った今村との“two shot”である。

「まあ、お父様にそっくりですね」

久美さんは今村が期待した通りの言葉で応えてくれた。

『この人は優しい人なのだ』今村はその時思った。

浅田氏も「どれどれ見せて」と一応写真を手にしたが、今村の娘にはもともと何の興味もなかった。

「くみちゃんは旦那と初めてデートしてから、何回目かプロポーズされた？」

何でも気楽に聞く人だ。久美さんは意外にも

「案外早かったですよ。四、五回お食事しただけで決まっちゃいました」

とあつさり答えた。

「きつとハンサムな人なんでしょうね」

今村としては率直な気持だったが、

「いえ、それが全然……」と久美さんはおかしそうに笑った。

ご主人もこのメンバーで、キャディーは久美を評して、「あの旦那には勿体ないくらいよ」と遠慮のない事を言う。

午後のラウンドで浅田が大叩きをし、トータル打数九〇と崩れたのは、久美のスコアが少しでも良くなるように心を砕くあまり、自分のゴルフに身が入らなかったからである。

久美はボールを曲げない方だが、たまたま林に打ち込んだ時などは本人より先に行つてボールを見つけ、どの方向へ出すのが一番安全かを、手を取らんばかりに教えていた。久美のマークカーに指定されていた今村は競技が終つて、確認のため渡された久美のスコアカードを見た時、すでに生年月日を書き込まれている事に気づいた。

「おや、お誕生日過ぎたばかりですね」

と、いたずらっぽく笑う今村に久美はちよつとあわてたが、

「書き忘れるといけないと思って、先に書いてしまいました」

と、書かれた数字について悪びれる様子は少しもない。

クラブハウスに戻る大堤防の階段を登りながら、

「今日は大変お世話になりました。有難うございました」

久美は何の世話もしない今村にまで丁寧な礼を言った。

「今朝コースに出た時は、途方に暮れました。立派な女性ばかりで、どうしようかと小さくなっていたのに、思いがけず久美さんみたいな素適な方とラウンド出来て、本当にラッキーでした」

今村は元来人見知りする方だったが、歳と共にこんな事が平気で言えるようになっていた。

「有難うございます」久美も別に照れたりはしない。

「くみちゃん来月も一諸に回ろう。いいでしょう」

浅田氏はいでに、

「今（イマ）さんはどうする？」と聞いた。

Uゴルフでは、競技に参加を希望する者は、フロントの側に用意された申込一覧表に自分で名前を書き込む事になっている。一ヶ月前からの受付だから誰でもいい、最初にチャンスの来た人が三人分まとめて記入する事にした。かくして毎月一回、この三人は一諸に平日杯競技のラウンドをする事に決まった。

十二月に入るとコースを見下ろす大堤防から、新雪を頂く富士山が思いの外間近に眺められる。朝日を浴びて Morgengrot に輝く山頂には、時として季節風に吹き流される雪煙の白い帯が東へたなびくのが見える。今村はいつでもどこでも富士を仰ぐと幸せな気持ちになる。美しい自然に接すると心が洗われる。心が洗われると幸せを感じる。人工的な美には多少鈍感な所があつて、美術品などには余り関心がない分、自然には敏感だ。その傾向の延長線上にあるのかも知れないが、女性に対しても、こぼれるような笑顔よりも、どちらかという、さり気ない表情の変化に心を惹かれる。一〇〇キロメートル先の富士山に合せていた焦点を、ぐっと一気に近づけると、眼下には松林でセパレートされた箱庭のような一八ホールが広がり、その一番手前、堤防の階段を降りた正面にスタートハウスがある。久美は一人でその前に立ち、視線を泳がせて同伴プレーヤーを探していた。雪のような色白という訳ではないが、久美の清潔感は、白くたおやかな富士の姿に重なる所がある。

「お早よう！」

手を上げて声を掛けると、久美の固い表情に安堵の笑みが浮んだ。浅田氏はいつもスタートぎりぎりに、無帽の髪をくしゃくしゃにしてやって来るから、未だ当分は姿を見せないだろう。